

第二話

姦淫の女

「あなたを罪に定める人はなかったのですか」

(ヨハネ八・一〇)

♣死んでもいい

女の目に映っているのは自分を取り巻く人々が手にしている石塊ではありませんでした。澄んだ空にあふれる早朝の光でした。

(朝がこんなに明るいなんて、すっかり忘れていたことだわ)

女は別世界に來たような気がしました。

女の耳に聞こえてくるのは自分を取り巻く人々の荒々しい罵声や怒声ではありませんでした。はるかな上空で舞っている小鳥のかすかなさえずりでした。

(小鳥の声なんて、もうずいぶん聞かなくなった気がする)

女は自分が姦淫の咎で神殿広場の真ん中へ引きずり出され、石打ちの刑に処せられる寸前にいることを、遠い世界の、他人ごとのように感じていました。

いいえ、いいえ、そう言い切ってしまうのは嘘です。人ごとではないのです。他ならぬ自分のことなのです。でも、現実感が薄いのです。恐怖があまりに強いので反対の心理作用が働いているせいかもしれません。

(殺されるかもしれない、いますぐに。きっと殺される、いますぐに)

ほんとうを言えば、女はあの時からそのことだけを考え続けていました。

あの時、そう、あの時です。

あれからどの位の時が過ぎたでしょうか。たった今のようにも思えるしずいぶん前のような気もするのです。

「姦淫の女め、石打ちを覚悟しろ」

「神の律法を犯す汚れた者よ、引っ捕らえるぞ」

「汚れた女よ、死ね、死ね、死んでしまえ」

何人の男たちが闖入してきたのか、むろん女に数える余裕はありませんでした。人間の声とさえ思えなかつたのです。野の獣たちが大挙して乱入してきたのだと、とっさにそう思ったのです。都ににいるのだからそんなことがあるはずがないし聞いたこともないのに、それ以外のことは思いつきませんでした。

髪を捕まれ、下着のまま外に引きずり出されて、女はようやく事の次第を理解しました。

(殺されるのだ、きっと。殺される、殺されてしまう)

女は衝撃と恐怖のために全身をわななかせながら、背を丸めてうずくまっていました。

「歩け、歩くんだ。さあ、立て、立つんだ」

「お前のような女は都エルサレムの恥だ。成敗してやる」

「神のみ名を汚す売女め、地獄の底へつき落としてやる」

「神殿の広場へ行くんだ。聖なる神の民が裁きをつける」

こぶしを振り下ろす者、足げにする者、わめき立てる者の前に、女はなす術を知りませんでした。痛みをこらえきれなくて小さな悲鳴をあげながらますます身を縮めるばかりでした。

（助けて、助けて、だれか助けて、お願い、だれか助けて）

のど元まで言葉が上がってくるのですが、声にならないのです。恐怖がいつそう強く体中を締めつけてきます。

（殺される。きつと。連れて行かれて、そこで殺される）

おそらく、死の恐怖ほど強いものはないでしょう。それは直面した者でなければ決してわからない魔の淵と言えましょう。女はいつそのままたここで息絶えたらどんなに楽だろうと、かなわぬ願いを追いかけるのでした。

神殿の広場に引き出されてさらし者にされるなら、せめて最後にあの嗜れ着をまといたい、と、祭りの日のための一枚きりの上衣が無性に着たくまりました。でも、これほどかなわぬ夢

があるでしょうか。

女はむき出しになった肩に手を当て、あらわにされた裾すそを気にしながら、よろよろと歩き出しました。

「イエスはどこだ」

「おお、もう来ているぞ」

「あそこだ、あそこだ」

男たちの幾人かが地響きを立ててかけ出しました。

「早くするんだ、この淫売女め」

「ううっ……」

息の根が止まるほど背中を蹴られたとき、女は初めて涙を流しました。と、体を裂くように涙があふれ出し、つき上げてくる激しい慟哭を抑えることができませんでした。

泣くつもりなどなかったのです……。

女はある時を境に、今後決して泣くまいと心を決めたからです。どんなに涙を流したって、どんなに泣いたって、だれがどうしてくれるわけでもない、どうにもならない人生なのだ、わかったからです。涙は少しの慰め役にもならなかったばかりか、泣けば泣くほど悲惨な現状

があらわになるばかりだったからです。それからというもの、女は日照り続きの荒地のよう  
なひび割れた心を引きずりながら、朝を迎え、夜を送ってきたのでした。

また激しく背中を突かれて、女は地に倒れました。夢中で立ち上がろうとすると、  
「動くな、そのままでいろ」という声がしました。

(ああ、もうおしまい……)

女は最後の場所に来たことを知りました。とっさに両手で頭を覆って地をなめるように身を  
伏せました。石つぶてが容赦なく降ってくるにちがいないからです。絶体絶命です。

(でも、いい、もう、死んでもいい……)

そう覚悟した時でした。

### ♣辰

「先生、この女は姦淫の現場で捕まえられたのです。よく、ごらんください」

慇懃な口調が女の耳をかすめました。

「モーセの律法によれば、こうした罪ある女は石打ちにせよとあります。ところであなたでし

「たら何と言われますかな」

「あなたは取税人と食事をしたり、安息日を破つたり、神でもないのに、罪をゆるすなどと、大それた宣言をしておられるようですが、歴然とした姦淫の罪にはどうさばきをつけるのですか」  
「さあ、返答していただきたい」

（おやつ？）

なにか別のことが始まったようです。危機の風向きが変わったようです。女はその隙に小さく息をつきました。極度にこわ張った体内に血が流れ出し、生命活動が再開したかのようです。しかし、一瞬でも伸ばされた生をどう扱ったらいいのでしょうか。覚悟を決めたのですから。もう、おしまいと思つたのですから。

と、すぐそばに静かな呼吸が聞こえました。

（だれか別の人がいる。私のそばに。だれなのかしら？）

女は低く頭をあげました。

先程までの荒くれ男たちとは別の一団が、一人の男に詰め寄っているのです。女の目には彼らの上着の裾が落ち着きなく揺れ動いているのが映っています。足下まで垂れた長い衣は女が見たこともない上等の亜麻布でした。彼らこそはユダヤを代表する知識階級の人々で、民衆

に君臨する律法学者、パリサイ派の連中でした。

(身分の高い人たちだわ、この人たちは。でも、私のそばのこの人はだれなの?)

たしかに一人の男が女のすぐ隣にかがんでいます。男はこの騒ぎに動じた風もなく、うつむいて地面の上に文字を書くようなしぐさで指を動かしています。

「やい、売女め、もつと顔を上げる。恥を受けろ」

「石打ちだ、石打ちにするぞ」

「みんな、よく見ろよ。これが姦淫の女だぞ」

また、背後から罵声が乱れ飛びます。女ははじかれたように身を縮めました。

「皆さん、お静かに」

その時、パリサイ人と思われる一人の男が、群衆の方に向かって重々しく、氣取った語調で語り出しました。

「ご承知の通りここに引き出されているのは神の御名を汚す汚れた女、いまわしくも姦淫の現場で捕らえた女です。

ところで皆さん、女のとりにいる男をご存じでございましょうな。そうです、彼こそナザレのイエス、神を冒瀆することにおいては女と同罪のナザレのイエスです」



たちまち辺りは静まりかえりました。男はなおも続けます。

「イエスは今朝も早くからこの聖なる神殿に入り、恐れ多くも神の名を使って、新しい約束と称するものをさかんに吹聴し回っていました。イエスの説くところは我らが偉大な祖先モーセの律法に明らかに反するものです。つまりイエスは神にそむく大罪を犯しているわけです。放つてはけません。我らばかりでなく、純朴な民衆を惑わし、神の怒りに引き込もうとしているのです」

（何が起こつたのだろう。何が始まるのだろう。私は、私はどうなるの。私は……）

女はこの意外な展開にすっかり困惑していました。パリサイ人のアツピールの声など訳のわからぬ一塊の不規則音にしか聞こえません。

（先生とかイエスとか言っていたが、この方のことだろうか）

女はそばに座す一人の男、ナザレのイエスに再び強く意識を傾けました。

（ナザレのイエス……どこかで聞いたかもしれない……）

女の思いをさえぎるように、またお偉方の一人が口を開きます。今度こそ返答させずには置かないぞと言わんばかりに威圧的です。

「さあ、先生、さつきからお尋ねしています。この女をどうなさいますか。日ごろのあなたの

教えから納得のいく答をしていたきたいものです。石打ちにしますか、それとも律法にそむいても、あなたの愛の教えによってこの姦淫の大罪を黙認しますか」

「なぜ黙っておられますか。ご返事ができないのですか。さあ、さあ、返答していただきますよう」  
「もう、逃れられませんぞ、ゆるしませんぞ」

「よろしいですか、あなたの返答次第では石つぶてはあなたに向けられるかもしれませんぞ。神を冒流した大罪で」

長服の裾を大仰に揺すりながら、男たちはまたイエスを詰問しました。張りつめた固い空気の中で群衆は身じろぎひとつせず成り行きを見守っています。荒野の夜のような静寂が厚くあたりを覆っていました。

ふっと、女は思いました。

（つい今しがたまで危険は私をねらっていた。死んでもいいと覚悟を決めたわ。それがどう？ 今はこの人が責められている。なんだか私の身代わりみたい。そう、身代わりだわ、この人は。）  
女はイエスに対してすまないような気がしました。もちろん危険は去ったとは言えません。

イエスの返答次第ではいつなんどき石つぶてが飛んでくるかも知れません。一難去つてまた一難、そうなるかも知れません。でも今、この一瞬だけは一難が去ったのです。思いがけない味

方が現れたのです。さっきまでの孤独と恐怖が薄れていくのさえ感じました。

(でも、この人は何と答えるのだろう。私の命はこの人の考えひとつにかかっているようだが)

### ♣ イエスの宣言

女が現実を意識を向けた時イエスはようやく身を起こしました。

その瞬間でした。

女は異様な気配を感じ、異様な光景を目にしました。

イエスのはほんの少し顔を上げただけなのに、群衆は激しい風塊に襲撃されたようにわつとどよめき、一、二歩後ずさりしていました。その真ん中へ、イエスの声が響きました。

「よく聞きなさい。いいですか、よく聞くのです。

あなたがたのうちで自分には何の罪もない、神の前に潔白だといいい切れる人がいたら、その人が最初に石を投げなさい」

イエスの声には空の果てまで刺し通り、しみ込むような、強さと柔らかさが満ちていました。

イエス是一群をゆつくりと見回し、一人一人の表情から心の中を読み取っているようでした。それからまた先ほどと同じようにしゃがんで、何事もなかったように同じ地面に指で何かを書

き続けました。

女はイエスの言葉の意味がよくわかりませんでした。とても難しいことを聞いたように思いました。

(罪のない者が石を投げなさい、ですって？ 罪のない者が……)

ああ、もうだめ、石が飛んでくる。

そうであつても不思議はないのに、例の偉い人々は棒にでもなつたように動こうとはしません。遠巻きの群衆も巨大な岩穴の底に沈んだようにいよいよ静まり返っています。

(この人は私をかばっているかもしれない。少なくとも自分から石を投げたりはしないだろう) 女はイエスの指を見つめました。イエスの指はゆっくり地面の上を行き来しています。何を書いているのでしょうか。女にはそれを判読する識字力はありません。いえ、それ以前に、読んでみたいという知的欲求など微塵もありませんでした。それどころではないのです。次の瞬間、命がないかもしれないのです。女の意識はどうしたつてそこへ戻つていつてしまいます。と云つて今、何をしたらいいのでしょうか。イエスの指先を追う以外にないのです。

## ♣ 神の指

もの書くイエスは女を見ようとはしません。群衆にも視線を向けません。顔を地に向け、ゆっくりと指先を動かし続けます。群衆に投げかけた言葉の反応を待っているのでしょうか。そうかもしれません。時間をつぶしているだけとは思えません。書くことにかかりの心を傾けていようでしたから。

女はイエスの指に吸い寄せられていきました。軽やかに、しなやかにイエスの指が動きます。と言って、その手はもの書く人にふさわしいとは言えません。日に焼けた手首、荒れて血管の浮き出た甲、骨張った節の高い指、どうみても労働を積んだ人の手でした。じっと見ているうちに女はイエスの手に妙な親しみを感じました。同じ血が流れていると思えるのでした。

ふっと、遠い日の母を思い出しました。男と女の違いがあるはずなのに、イエスの指が母の指に代わっていました。幼い頃、母の両手ほど不思議なものはないと思ったものでした。母の両手は必要をすべてをかなえてくれましたから。抱きしめてくれました。背に負ってくれました。食べるもの、着る物を作ってくれました。母の指先を引っ張ってよく走ったものでした。何かのことからひどく泣きわめいたことがありますが、大きな温かい手が顔をくるんで涙をふき取ってくれたこともありました。

忘れようとしても忘れられないことは、初めて過ちを犯してしまった時のことでした。事実

を知った母はうつむいたまま黙って地面をさすっていました。そう、あの時、母はものこそ書かなかつたけれど、いくどもいくども地面をなでていました。ちょうどイエスの指のように。その両眼からあふれ出る大粒の涙が地面にしみ込んでいました。

そのまま女は父の手を思い出していました。

ああ、父は文字を教えてくれたのです。子たちを集めてはよく律法を朗読しましたが、ところどころの文字を自分の大きな手のひらに指で書いて示しました。時には家の外に連れ出して地面に書いたものでした。拾い上げた棒切れを使うこともありましたが、イエスのように指で書くこともたびたびでした。よく十戒を教えられました。

姦淫してはならない…

その者は石で打ち殺されなければならない…

女は耳元に、父の声を聞きました。

(そんな…父のはずがない、この人が言ったのだろうか)

女は小さく身ぶるいしてイエスを見あげました。イエスは女のかすかな気配を感じ取ったでしょうに、少しも様子を変えません。同じように書き続けているのです。

(この人はいったいだれなのだろう)

女は再びイエスの指に視線を落としました。

つかの間、イエスの指が光ったのです。

(ああ、神の指のよう……)

女はとつさにそう思いました。父や母がよく話してくれた十戒伝授の物語がひらめきました。

偉大な預言者モーセが神の山シナイ山に上った時、神はご自分の指で石の板に十戒を書いたというのです。モーセはその板を抱きかかえて下山し、民に伝えたという厳肅なお話でした。いつ聞かされてもその度に心がしんとしたものでした。

姦淫してはならない、その者は殺されなければならない。

今度は父の声ではありませんでした。

(この人が言ったのだろうか)

女の心の方が聞こえたのでしょうか。

イエスは女の心がここまで歩んで来るのを待っていたように書く手を止めて身を起こし、顔を向けました。

♣ いのち拾い

「婦人よ、あの人たちはどこにいますか」

「あの人たちですって？」

そう言われて、女は我に返り、あたりを見回しました。

あつ？！

一人の人影もありません！

「あなたに石を投げる人はいなかったのですか」

女は息ができませんでした。

「だれも、だれも、いません……」

最後まで言葉が続きませんでした。どうして信じられましよう、広場をうずめつくしていた群衆の姿がないのです。どこへ消えてしまったのでしょうか。足音も、衣の擦り合う音も、呼吸すらも聞こえませんでした。つかの間にいったい何が起こったのでしょうか。あれほどの群衆がそっくりそのままいないのです。広場はちやうど廃墟のようでした。

いいえ、彼らは一度にかき消えたものではありませんでした。



一人一人、自分の心で決め、自分の足で歩いて、立ち去って行つたのです。

「罪のない者がまずこの女を打て」

イエスの一言が一人一人の心を刺し貫いたのでした。

罪のない者？

罪のない者？…

この関所をくぐれる者がひとりでもいるでしょうか。

イエスの一言は剣より鋭く人々の心に切り込み、どんな閃光よりも強烈な光度で心の闇を照らしたのです。人々は見ただけです、自分の心の中身を。その醜悪さを。罪がないなどと、どうして言えようか、それこそ神に裁かれてしまふ。だれもがそう思つたのです。手にしている石が自分の虚偽をあからさまに物語っているようで、それ以上その場にいることができませんでした。年を経た人々は特別に強くそう感じましたし、さすがです、ユダヤの宗教界のエリート、パリサイ人、律法学者たちは敏感に反応しました。

かなりの白髪をした一人が、手にした石で自分の胸をたたきながら去っていくと、我も我もとばかり瞬く間に一人残らず立ち去つたのです。もつとも、イエスはかなり長い間ものを書いていましたが、女には時間の経過を意識する神経が働いてはいませんでした。気がついた時、

石振りかざしてののしった人々はただの一人も残ってはいませんでした。

イエスと女、二人だけしかいませんでした。

命を拾った！

女の体の中で本能的な生命力がそう叫んだことは確かでしょう。この方のおかげだわ！  
この方こそ命の恩人！

それもわかりました。

しかしこの予想外のできごとを正確に受け止めるためにはあまりに時間不足です。心も頭もすっかりその働きを忘れてしまったのでしょう、女は茫然と立ちつくすばかりでした。

イエスは女の様子を察したのか、現実をはっきり知らせるために一言一言、間をとりながら穏やかに言いました。

「あなたを罰する人々はもういないのですよ」

「……」

ああ、女はまだまだ返答できる現実感を持ってません。おそろおそろイエスを見上げるばかりでした。イエスの表情からも事実の真偽を確認したかったのです。

（ほんとうに助かったのですか。死ななくてもいいのですか。あなたは私の罪を承知で助けら

れたのです。どうして助けてくださったのですか。この先も生きていいということでしょうか。生きることを許してくださいませんか。

ああ、あなたはいったいどなたですか？

俄然、女の心にイエスの正体を知りたいという熱い願望が噴き出しました。

（このお方はただの人ではない。モーセのような、また、エリヤのようなお方、いいえそれもちがうような気がする。もっと聖なるお方だ）

こんなパニックの中で、いいえ、だからこそ、目覚めたばかりの魂の目は深遠な霊の世界に直線的に向いていったのでしよう。

女は思うのです。

（このお方は短いことばひとつで、しかも決して荒々しいことばではなく、おだやかなことばで、あれだけの人を一度に退散させてしまった。そんなことがだれにできようか。このお方はただの人ではない……）

その思いの中に、一条の光が走りまわりました。

（もしかしたら、このお方はメシヤと呼ばれる方かもしれない、必ずおいでになると約束されている、あのメシヤにちがいない）

女の胸が異様に高鳴りました。

「婦人よ、心配しなくてもいいのです。もう二度とあの人たちは来ませんよ。あなたを罰しに来たりしませんからね」

「……」

女はまだ答えられません。答えられないのです。もしかしたらメシヤかもしれない高貴なお方の前で、石で打たれて当然の姦淫の女がどうして物言うことができるでしょうか。

（イエス様、そんなにおっしゃらなくてもいいのです、私は罪ある女です、姦淫の女です。私を離れてください、汚れた者です、イエス様……）

女は心の中でそう叫ぶのが精一杯でした。

と、急に力が抜けて熱い涙が吹き出しました。大地が待ちこがれていた雨期の初めの雨のようでした。激しい音を立てて、快い響きを立てて、山に川に丘に滴る雨足のようでした。女は声を上げて泣きました。幼い日に、母の前で、父の前で、兄弟の前で、人目などお構いなしに泣いたように、無遠慮に、手放しで泣いたのです。イエスの存在も気になりませんでした。いえ、イエスのそばにいるからこそ安心して泣けたのです。

泣くことは心と体と魂の総合活動です。我を忘れて泣いているうちに女のいのちが躍動的に

働き始めたのでした。女は少しづつ平靜心を取り戻していききました。

♣ イエスのゆるし

その時をイエスはじっと待っていたようでした。

「婦人よ、よく聞きなさい。わたしもあなたを罰しません。いいですか、これからはもう決して罪を犯してはいけません」

イエスの声にはおかしがたい威厳がありました。天から響いてくるようでした。語気は決して強くはありませんでしたが、地にひれ伏してしまいたいほどにおごそかでした。

「罰しないって、ゆるしてくださいということですか」

女の声がイエスの耳に届いたかどうかわかりません。女は力一杯叫んだのですが、音声になっていなかったかもしれません。女はなおも続けました。

（ゆるしてくださいるのですか、イエス様。私のような罪人を。ほんとうに罰しないと云われるのですか、石打ちにされて当然の、いまわしい姦淫の女です。それでもゆるしてくださいるのですか）

女はイエスの宣言を丸ごと自分のものにしたのです。一言だつて聞きもらしたくはないの

です。だれにも渡したくないのです。だれにも聞かせたくないのです。独占したいのです。貴いしるしなのですから。これから生きていくための唯一のよすがなのですから。生涯で初めて知った美しい愛、真実な愛ですから。

（この愛があれば生きていける。この愛さえあれば、きつと生きていける）と思えるのです。「これからはもう決して罪を犯してはいけませんよ。よくよく気をつけて、清く生きていくのです」

女はもういちど母の声を感しました。叱っているのではなく蔑んでいるでもないのです。威圧的に命令しているのでもありません。大切な者が、愛する者が、いとしい者が、罪に負け、罪に汚れて行くのを見るに忍びない。悔しくて、悲しくて、惜しくてたまらないと叫んでいるようなイエスの嘆きがそくそくと伝わってくるのです。罪をゆるされた女はイエスの愛の真実がわかるようになっていました。罪をゆるされた女は生まれ変わったのです。新しい魂を宿した女はもう罪の女ではありませんでした。もう姦淫の女ではありませんでした。姦淫の女は死んだのです。

「行きなさい、これからは罪を犯さないように」

イエスは新しくなった女に新しい歩き方の一歩目を教えているのです。

(はい、イエス様、あなたの前から歩き出します。ずっとこのままおそばにいたいけれど、歩き出します。おことばですから出発します。生きていきます。罪を犯さない道を歩きます。もう罪は犯しません。二度と犯しません。お守りください、イエス様、そうできますように)

女が立ち上がった時、数人の男女がイエスのそばに駆け寄り、弾んだ声で話し始めました。イエスの弟子たちでした。

女は背にイエスの視線をしっかりと感じました。弟子たちの視線も感じました。それは雨雲を割って射す陽の光のように明るく暖かく女を包み込むのでした。

「しつかり生きていくんだよ」

「過去を悔やまずに、未来を見るんだよ」

「罪ゆるされたんだから、ね」

「イエス様こそ待望のメシヤ、イスラエルを救うお方だよ」

「私もあなたと同じだったわ。このお方に救われたの。このお方に新しい人生をいただいたの。

真実の愛をいただいたの。きっと生きていけるから。この愛を忘れないで。このお方を信じ通すのよ」視線に込められた弟子たちの声を女の魂はしっかりと聞き取っていました。とりわけ女性の弟子の声をうれしく聞きました。

（ああ、私もこのお方のおそば近くでお仕えしたい。でもイエス様、あなたは言われた「行きなさい」って。だから行きます。けんめいに生きて、いつかふたたびお会いしたい。きつときつとお会いできますように。それを祈って生きていきます）

女は神殿を出ると都エルサレムの町中に消えていきました。

その後、女が願い通りにイエスに再会したとは聖書はもちろんのこと、イエスに関する伝承の片すみにも記されていないようです。では悲しくも女はついにイエスに会うことなくその生涯を終えたのでしょうか。

ふと思うのです。もしかしたら聖書のどこかにまぎれこんで再登場しているのではないかと。姦淫の女としてではありません。女はもはや姦淫の女ではないのですから。

ゴルゴタの丘のどこかで、十字架上のイエスを仰ぎ見ていたかもしれません。胸を破る慟哭に身をよじりながら。

イエスが葬られた時、墓のかたわらに人目を忍んで座り続けていたかもしれません。涙に目をつぶして。

復活の主を二階座敷の近隣でかいま見たかもしれないのです。歓喜の奔流に押し流されながら。



初代教会の群れの中に、きつといたにちがいありません。愛の業に、宣教に、かがいしく立ち働いたにちがいありません。とりわけ悲しい身の上の女性たちのために半生をささげ尽くしたことでしょう。なぜなら、イエスに罪ゆるされた者、イエスの愛を知った者は、イエスがゆるしたようにゆるし、イエスが愛したように愛さずにはいられないのですから。新しいのちに生きるとはそういうことですから。